Les méditations 瞑想録•観想生活に関する書簡

いのちの庭

Tomomi KOIZUMI
小泉友美

目次

観想生活において自然と生きる事• いのちの庭 1

観想生活において自然と生きる事• いのちの庭

Les Méditations 瞑想録• 観想生活に関する書簡より (1109 年刊行)

観想生活において自然と生きる事• いのちの庭 Guigues le Chartreux ギーグ 1 世 (1083 年- 1136 年)

ギーグ 1 世 (1083 年- 1136 年) は、1083 年、フランス東部のドローム県のバランス Valence にあるドゥー谷近くの城で生まれました。
幼い頃より重い病に苦しみ、シャルトル修道会に入会。理想的な孤独の観想生活を送りました。
シャルトル修道会 (Ordo Carthusiensis カルトゥジオ会) は、1084 年に、フランスのグルノーブル付近のシャルトルーズの森に、聖ブルーノによって開かれた、絶対孤独なキリスト教修道会。
修道士は、独立した庭と仕事場、寝室を持つ小さな部屋に一人で住み、二度の食事と聖務の他は、個人的な祈り、読書、手仕事などの作業をして過ごしました。
神によって魂を捕らえられた観想家
(le contemplatif captivé par Dieu)
1109 年、自然を讃える祈りの書 "
瞑想録 Les méditations" を出版しました。

このシャルトル会において、孤独な観想生活への愛がいかに重要であるか、ギーグ 1 世は自分の観想日誌において、自然への愛を強調しています。

11 世紀の中世フランスの雪深い山脈において、ギーグ 1 世は、魂が孤独の内へとこもってゆく、深い精神的な生活、砂漠における使命 (
l'appel du désert) を見つけました。

この砂漠における使命とは、世俗の喧噪と切り離される、誰もいない、自然 (砂漠) において、一対一での絶対なる存在 (神) を探し求めました。

1121 年から 1128 年にかけて記述された、" シャルトル会の慣習 Consuetudines Cartusiae" の著作において、自然の中に生きる事の必要性が書かれています。

シャルトル会修道士は、孤独の探求者 un chercheur de solitude と自ずから称して、緑の

苔生す川、森林の中で生きる事、祈りの中で純粋な心 la pureté du coeur を保ち、神の胸元に寄り添い、大きな愛を探し求めます。

シャルトル会の修道士の使命は、沈黙であり、魂の休息を求めてゆきます。それは、" 哀歌" 3 章 28 節、第三の歌 “軛を負わされたなら黙して、独り座っているが良い。” の心境です。
自然と共に詩篇を読み、深い祈り、涙の洗礼 (涙が自然に流れるままにする、一種の心の祈り) に生きます。

ギーグ 1 世の自然への感性は、神の創造の秘密に関心があり、この自然の観想は、寒さ、温かさ、甘さ、酢っぱさという感覚が庭にありふれる、ありとあらゆる葡萄酒、乳、蜜、ヘーゼルナッツを見る事、触れる事、聴く事を、引き起こされてゆきます。

このギーグ 1 世の著作" 瞑想録" よりインスピレーションされて、修道院の庭の散歩をして祈る修道士を独自に創造して、自然と共に生きる祈りとは何かをまとめてみたいです。

いのちの庭 或る一人のシャルトル会修道士 の散歩

このシャルトル修道会の途方も無く、長く続く壁に囲まれた庭は、自然の美々しい愛に満ち溢れて、創造の命の秘密に耳を傾ける事が出来る。
この観想の散歩において、一歩ずつ、歩を進める毎に、寒さ、温かさ、甘さ、酢っぱさ、苦味と平和の美の音楽会が行なわれる。
葡萄畑の丘、勢い良く湧き出る雪の溶け水、茨の棘と麦畑、この自然を讃える道は喜ばしく、平和の内に辿って行く事が出来る。
湖に波紋が細々と散り散りに、果てしなく揺れ動いて、この感情のざわめきは、少しずつ水滴の音によって穏やかになってゆく。
愛の庭とは、主・ キリストの愛によって創られた音楽の饗宴であり、平和の美を受ける事が出来ます。
春には、薔薇、百合の美しさ愛で、秋には、葡萄畑一面の酢っぱさの中、喜々として、歩を進めてゆきます。冬には氷、雪がシャルトル修道会の砂漠に触り積もってゆき、ナルドとミルナの甘い香り、コフェルの花房、レバノン杉と、糸杉がつんと天上へと矛先を伸ばして、無花果、柘榴、シナモンが朝露に濡れてゆきます。棘だらけの枝が両横へと広がってゆく。山羊の乳、乳香、蜜蜂の蝋、オリーブの実とオリーブ油、葡萄の紫水晶の様な艶々とした房から搾られたワインの恵を両掌に、溢れるままにいただく。そして、この魂の病を癒す。
人の命は庭の様なもの。
聖書において、庭は重要な場所。
命の木と善悪の木 2 本、そのまわりを多くの高低がある果物が実った木々が茂っている。清らかな水が深い地中より地面へと、コポコポと湧き出していき、すべて潤してゆく。そ

して、水のある庭となった。エデンの園から追放された時、アダムとエヴァは両掌をおおって泣き、自分達のいた美しい、失なわれた楽園を思い出して、後悔して、永遠なる神の愛、平和を喪なった事への悲しみに浸る。
その苦しみは、目の前に広がる大海の様に果てしない。
優しきキリストは庭師を装って、喪に涙するマグダラのマリアの目の前に立ち、死よりよみがえりし草花が咲き開いてゆく。
春の庭の中、慰め、別れを告げて、天上へと戻っていった。
悲しみの病は、喪失によって訪れる。この悲しみは、涙を流す事を通して、心が動かされる事。暗闇に沈んだ心は、生きる力を無くす。
精神的なこの庭師は、手塩をかけて雑草を取り、マグダラのマリアの心の中にある全ての思い煩いを除って、命の庭を美しくする。
植木鋏、刈り込み鋏といった道具を整えて、切って、全ての散々に伸ばしっ切りの草々を整えて、切って、あらたに土地を整える。
良き種は、伸び伸びと成長させて、美味しい果実を実らせる。
生きる事で、良き事も起これば、悪しき事も起こる。
種蒔く人の蒔いた種の多くは、鳥の訪れによって、ついばまれ, 他の種は芽が吹き出して、朝陽が昇ると真っ黒に焦がされてしまい、枯ら枯らとなる。
種蒔く人のまわりに、鳥が群れてゆく。
この愛の庭の巡礼を通して、生きる事の道しるべを示してゆく。
キリストは、この世を照らす光そのものであり、私と共に導く者は暗闇から引き離されてゆき、命の光と共にある。そして、道、真実、光、命に満たされてゆく。良き医者である導くキリストは、病人達を癒す薬を与える。
オレンジ色の夕陽に透かされる葉脈、薄く穴の空けられた八重の花弁に吹く風。
自然の中で、神の光に触れる事が出来る。この光は、この世を照らし、私と共に歩く者は既に暗闇は無い。
暴力的な感情のざわめきは、まるで水面に細やかに揺れる波紋と似ている。緑の藻にすっぽりと覆われている沼は平和の象徴。
深い底より、山脈から運ばれて来た雪どけの冷たい水を目の前にすると、全ての心身の苦痛より私達は切り離されて、自分の中にある混乱をも受け入れられる様になる。
そして、この暗い病と苦しみから脱けて、内なる讃歌、喜びに有難うと伝える。
この修道院の庭は、魂の良き医者、蜂蜜の様に甘く、病人達を癒してくれる。
何が魂にとって美しいのか?
それは、神を敬う事。
どのくらい？
心より、
そして、力を持って。
どのくらい？
死まで。
神より魂の奥底まで来て、
魂は身体に由来しない。

魂は身体に無く、
すべての動きは、神より来る。
すべては神に感謝する事。
光と香りに満たされた森の小径の奥へと、ゆっくりと、また一人、休ませていた歩を向かわせよう。

2026 年 6 月 3 日　フランス・　アンジェ Angers 平和　祈

Les méditations 瞑想録･観想生活に関する書簡

著　者　　小泉友美 Koizumi Tomomi

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社